

## 無住の歌徳観

朝 木 敏 子

### 一 はじめに

「本ヨリ田舎ニライソグチテ、文書モ習ハズ、歌道モ不知、仏法ノ一宗モ、実トシフ学セル事ナキ、ヒタソラノ山ガツニテ侍ルガ」と『沙石集』<sup>①</sup>の跋文に書いているにも関わらず、無住は和歌に並々ならぬ関心を抱いていた。著名な和歌陀羅尼説を説く巻五の説話群は計九七首（梵舞本）もの和歌を含んでいるし、晩年の著作である『雑談集』には、作の巧拙は問わず七十四首もの自作歌を掲載している。渡辺綱也氏が岩波古典文学大系の解説で、無住の学問に関わる多くの仏典などを挙げておられるが、「田舎ノ或山里ノ柴ノ庵ニテ、心許侍ルホドニ、書籍モ身ニソヘズ、手ニ任テ」書いた、と謙遜するわりには、無住は多くの「書籍」を身に添えて執筆にあたっ

たようである。特に、巻五末では『古今著聞集』や『十訓抄』などと類縁関係を持つ歌徳説話を多く見いだすことができる。無住の和歌的教養はどのようなものであったのか、またその基底をなすものは何であつたのかを考察したい。

### 二 長明歌論への接近

無住の歌徳に対する言説は、巻五に集中する。

a 凡狂言綺語ニ和歌ヲ入ル、事ハ、染歌ト云テ、愛情ニヒカレテ、ヨシナキ色ニソミ、空ノ詞ノカザル故也。聖教ノ理ヲモノベ、無常ノ心ヲモ連テ、世縁俗念ヲウスクシ、名利情執ヲモワスレ、風葉ヲミテ、世上ノアダナル事ヲシリ、雪月ヲ詠ジテ、心中ノ潔理ヲモサトラバ、仏道ニ入媒チ、法門ヲサトルタヨ

リナルベシ。サレバ、古人ノ仏法ヲ修行セシ、必ズシモ此道ヲステズ。折ニ随フ述懐、コレ多ク聞ユ。

(第五本(一一))

b 和歌ハスメル心ヨリ出テ、詞スクナク、コトワリ深キユヘニ、発菩提心ノ、タヨリタルヤ。(第五本(一一))

a は歌を好む弟子の稚児が歌を詠じるのを聞いて、恵心僧都が狂言綺語であると忌み嫌っていた和歌に対する一大回心をし、和歌を詠じるようになったという、『袋草紙』・『発心集』などに類話が見られる説話の末尾の評語である。b は兼盛の歳暮の歌を聴いて、村上帝が発心したという話の末尾に付されたもの。

まずここに見られるのは、仏道への媒介としての和歌、菩提心の拠り所になる歌、という一種の和歌仏道一如思想であろう。『袋草紙』の当該説話の評語にも、「和歌は観念の助縁と成りぬべかりけり」とあるのでこの考え方は少なくとも清輔以前、かなり早い時期から、この源信説話に付随して、享受されてきたものと思われる。

『発心集』は、「昔モ斯ル事、発心集二見ヘタリ」(巻七―二)と、無住自身が『沙石集』の先行文献と認めるものであるが、その第六(九)の該話の末尾でも、源信

は「<sup>③</sup>聖教と和歌とは、はやく一つなりけり」と感慨を述べる。そして、該話の初めには三時の勤行の代わりに和歌を詠んだという宝日上人の話に繋ぐかのように「和歌はよくことわりを極むる道なれば、これよせて心をすまし、世の常なきを観ぜんわざども、便りありぬべし」とbに近似した文言を述べている。

これを、<sup>④</sup>狂言綺語観の展開の相として捉えるなら、確かにそれは決して目新しいものではない。狂言綺語にまつわる言説はかなり古い時代から、多くの文人や歌人達があるし、研究史の中でも様々に論じられてきた。中世という時代に着目するなら、今は、『古来風體抄』の序文に、摩訶止観にこと寄せた明確な和歌仏道一如思想が言揚げされていたことを押さえておけば十分だろう。

無生の和歌観を中心に据えて考えるなら、むしろ今は、「心中ノ潔理」「コトワリ深キユヘニ」という表現に着目したい。和歌仏道一如思想が、『袋草紙』『発心集』両方の恵心僧都説話に付されて享受されていたとすれば、その両者を区別するのは、むしろこの「ことわり」重視の和歌観だと考えられるからである。『発心集』の成立については、後人増補説もあり、不明朗な点もあるが、

『無名抄』「近代歌体事」には次のようにあった。後にも述べるが、『無名抄』は無住の和歌的教養の一端をなすものと考えられる。

すべて心ざし詞に現れて、月を「くまなし」といひ、花を「妙なり」と讃めん事は何かは難からん。いづくかは、歌、たゞものをいふに勝るを徳とせん。一詞に多くの理を籠め、現さずして深き心ざしを尽くす、見ぬ世の事を面影に浮かべ、いやしきを借りて優を現し、をろかなるやうにて妙なる理を極むればこそ、心も及ばず詞も足らぬ時、是にて思ひを述べ、僅三十一字が中に天地を動かす徳を具し、鬼神を和むる術にては侍れ

長明の歌論が、「ことわり」を無視しては成立し得ず、その根元にあるものは天台教学による諸法実相の「ことわり」である、岩崎礼太郎氏は述べたが、千載・新古今の歌人である長明の歌論と、a、bに見る無住の和歌観は、「ことわり」の重視という点では非常に近いことになる。『古来風體抄』が摩訶止観と密接に結びつき、また「長明の思想的な立場が、天台浄土教の、きわめて優れた正統的な理解者というところ」にあったのであれば、『沙石集』に見る和歌仏道一如思想の思想的背景に

は、ひとつ長明歌論にまで連綿と受け継がれてきたと同様な天台教学を置いておかなければならぬだろう。摩訶止観と摩訶止観注釈書は、少なくとも、巻五までの構想に大きく関わっていたのだし、構成上大きな意味を持つと思われる巻五本（一）の冒頭の条で、僧が誦して鬼神を退散させたのも

円頓者。初縁実相造境即中無不真实。繫縁法界一念法界。……中略……是名円頓止観。

と摩訶止観の文言であったのだから。

また、『沙石集』全体の構想という面から考えるなら、巻三の論説の中心をなすのが、冒頭の「癡狂人ノ利口」、  
「死ニタレバコソ生タレ。生タラバ死ナマシ。カシコクゾ死ケル。凶ニ死ヌラムニ」というパラドックスであったことを、思い出さなければならぬだろう。そのパラドックスを執拗に繰り返すことよって、無住は「無辺ノ法門」を説き、巻三の構想の中心をなす原理、「道理」を説くことができた。それは、「事ハカギレルニニテ、心ハヒロク、世間出世ノ深キ御法ノ理マデ、通テコソ覚ヘ侍レ」「癡狂ガ利口、自ラ世法仏法ノ無尽ノ義理ヲフクメリ」と、利口は義理（理）を盛りこむ容器として機能し得るといふ、特異な言語観に支えられていた。和歌

もしかりと、無住は言いたいのである。

この無住特有の、「ことわり」を中心とする言語観を思い合わせれば、「ことわり」重視の和歌観の持つ意味は軽くない。著名な和歌陀羅尼説もまた、それとは無縁ではないからだ。

c 世間出世ノ道理ヲ、卅一字ノ中ニツツ、ミテ、仏菩薩ノ応モアリ、神明人類ノ感モアリ。彼陀羅尼モ、天竺ノ世俗ノ言ナレドモ、陀羅尼ニモチキテ、コレヲタモテバ、滅罪ノ徳、拔苦ノ用アリ。日本ノ和歌モ、ヨノツネノ詞ナレドモ、和歌ニモチキテ思フノブレバ、必感アリ。マシテ仏法ノ心ヲフクメラシムハ、無疑陀羅ニナルベシ。(巻第五本(一一二))

d 聖人ハ心ナシ。万物ノ言ヲモテ言トス。聖人ノ言、アニ法語ニアラザランヤ。若法語ナラバ、義理ヲフクムベシ。義理ヲフクマバ、惣持ナルベシ。惣持ナラバ、即陀羅ニナリ。此心ヲモテ思ニ、神明仏陀ノ和歌ヲ用給事、必ズコレ真言ナルニコソ。(同)

陀羅尼もまた、道理・義理、すなわち「ことわり」を含むものなのであり、和歌もその「ことわり」を含んでこそ、仏菩薩、あるいは神明の感応を得ることができるのであると述べる。「ことわり」をキー・ワードに、無住

の歌徳観と長明の歌論は、意外なほど近い。

和歌陀羅尼説それ自体の比較的早い例については、池仁氏が、『和歌知頭集』冒頭の記述をあげている。これは源経信に仮託された書ではあるが、少なくとも文永二年(一一六五)には存在し、鎌倉時代には相当流布していたことが知られている。<sup>10)</sup>

夫大和歌者人の心をたねとして、よく人の心を和ぐるがゆへに、隱遁の源として、菩薩をもとむるはじめなり。まづ極樂に歌舞菩薩まします。天竺に陀羅尼の詞あり。漢土に詩賦をつくる。それ六種にわかれたり。中にも我國の風俗として、神代七代のむかしより末世のいまにたえず。

ここには、和歌陀羅尼の様々な要素を見いだすことができるが、今は、これが『古今集』仮名序にこと寄せて書かれてあることに着目したい。『沙石集』長享本巻五の末尾(古活字本も同じ)近くにも、次のような記述が見えるからだ。

長明が云はく、忠胤僧都の説法に、淨藏淨眼の十八変を、經には、或現大身、満虚空中、而復現小といへり。此事詞をかへて、大身を現する時は虚空も狭くなり、小身を現する時は、芥子の中にあると。

口伝随分秘事也。和歌の風情はかかるべしといへり。古今の序には、和歌は其の根を心地につけ、其花を詞林に開くといへり。この道の口伝、このことばにつきたり。

西行法師修行の時、江口の長者が宿をかざざりし時、世の中をいとふまでこそかたからめ飯のやどりををしむ君かな

と云ひたりける返事に、

世をいとふ人としきけばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ

としたりける心、根も花もあり。この心をもて返事に、世をすて給へる人と聞けば、かかる所に心ばしとむなと思ひてこそ、借しまるらせぬ。さらばおはしまして、とまり給へとばしいひたらば、さしもの撰集に、いかが入るべきや。長明がいへる事、古今の序、その心えられたり。(巻五十二 連歌の事)

「さしもの撰集」は新古今和歌集のこと。忠胤僧都の説法云々の記述は、『無名抄』「歌似忠胤説法事」の引用である。この直前にも、赤染衛門の和歌に関する『無名抄』の引用があるからには、ここでも長明歌論の無住に及ぼした影響は、十分考えて良いであろう。現在判明し

ている限りにおいては、無住と歌人、あるいは和歌の家の人との交流は考えられていない。長明に關しても「長明は俊頼の子息俊恵法師が歌の弟子なり」(長享本・巻五)という程度の知識でしかないようである。しかし『発心集』と同じように「無名抄」は「沙石集」の重要な先行文献なのであり、無住はこれを通して長明の歌論にも触れている。そしてなによりも注目したいのは、ここでもこの「無名抄」とならんで「この道の口伝」として、重視されているのが、古今序だという事実である。波線の部分が、古今真名序冒頭の「夫和歌者。託其根於心地。発其華於詞林者也」であることは言うまでもない。同じく長享本巻七―六(古活字本巻七)「嫉妬の心無き人の事」の

或人妻を送りけるが、雨のふりければ、色代に、けふは雨ふれば留まり給へと云ふを、既に出でたちて、出でつつかくこそ詠じける。

ふらばふれふらずばふらずふらばとてぬれて  
ゆくべき袖ならばこそ

余りにあはれにいとほしく覚えて、やがて留めて、死のわかれになりにけり。

和歌の徳は人をやはらぐると云へり。誠なるかな。

の波線部分のふまえるところが、説話部分から察するに、おそらくは仮名序の「男女の仲をも和らげ、猛き武人の心をも慰むるは、歌なり」、あるいは真名序「化人倫和夫婦」であろうことは察せられる。であれば、『沙石集』は、古今序に根ざす歌徳観を併せ持っていたことになる。先に挙げた『無名抄』『近代歌体事』の中にも、「僅三十一字が中に天地を動かす徳を具し、鬼神を和むる術にては侍れ」と歌徳と古今序を結びつけて考える叙述があったことを考え合わせると、無住の和歌観に与えた影響は長明歌論とともに無視できない。広く、中世の歌徳観という視点に立てば、それは古今序と古今注という、歌人達にはなじみの深い言説の中で育まれたものであったからだ。

### 三 説話集と古今序注

そして、この古今序を窓口には、『沙石集』の世界は、『古今著聞集』・『十訓抄』の世界に繋がっていく。その傾向は、梵舜本では巻五末に顕著で、例えば、冒頭(一)「神明ノ歌ヲ感ジテ人ヲ助給ヘル事」は、以下のような構成になっている。

(1) 小大進という女房が、御衣を盗んだという濡れ衣を

着せられたが、北野天満宮に参籠し、「思イヅヤナキ名タツ身ハウカリキト アラ人神ニ成シ昔ヲ」という歌を奉ったところ、紛失の御衣が戻り、冤罪が晴れた。

(2) 貧しい母娘が石清水八幡宮に参詣し、身の貧しさを祈り「身ウサハ中クナニト石清水思フ心ハクミテシルラム」と娘が詠ったところ、下向の時に、勢い盛んな殿上人の夫を得ることができた。

(3) 小式部内侍が重病の時「イカニセムイクベキ方モオボ、ヘズ ヤニサキダツ道ヲシラネバ」と詠ったところ、天井に感じる声があり、病が癒えた。

(4) 大江擧周が住吉明神のたたりで瀕死の時、母の赤染衛門が「カワラムト祈ル命ハロシカラズ サテモワカレム事ゾカナシキ」と幣に書き付けたところ、白髮の翁が納受した夢と共に、病が癒えた。

これらの説話はいずれも、『十訓抄』<sup>14</sup>巻十才芸を庶幾すべき事、『古今著聞集』巻第五和歌の中の、かなりまとまった部位に同文的類話を見ることが出来る。表で示すと左記の通りになり、配列は全く同様で、ここから出典を云々することはできない。

沙石集	(1)	(2)	(3)	(4)
著聞集	卷五―一七七	卷五―一七三	卷五―一七五	卷五―一七六
十訓抄	卷十ノ一六	卷十ノ二二	卷十ノ一四	卷十ノ一五

ちなみに、(2)と(3)の間になる部分、即ち『著聞集』巻五―一七四、『十訓抄』巻十ノ十三は、(5)和泉式部と貴船明神の「もの思へば沢の蛸もわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る」「奥山にたぎりて落つる滝つ瀬のたま散るばかりものな思ひそ」の贈答歌を中心とした説話で、これの同文的記述は、『沙石集』巻五(一一)行基菩薩御歌事に収められている。

巻五末(長享本では巻五後半)の出典に関しては、略本系の本文をも合わせて概観すると、『著聞集』のみとの類話一話(『著聞集』では巻第五―二五話にあたる)

・或時、覆盆子を人の進じたりけるを題にて、歌つかまつれと仰せければ、

もり山のいちごさかしくなりにけりいかにうばらうれしかるらん

(「人有感歌」米沢本・長享本・慶長十年古活字本同様。梵舞本にはなし。但し、『著聞集』ではこれを一首の歌とせず、右大将頼朝と北条時政との連歌とする。)

これを除く類話の全てが、『十訓抄』から『著聞集』への抄入と目されること、また類話が『十訓抄』にだけ見いだせる説話(全て巻五末(二)「和歌ノ人ノ感アル事にある」)

・良暹が「大原ヤマダスミガモナラハネバ 我ヤドノミゾケブリタヘケル」と物を所望したという話(『十訓抄』巻十ノ四七)

・顕昭が「ウラヤマシイカナル人ノ渡ルラム 我ヲ導ケ法ノ橋モリ」の歌を詠んで法橋の僧位を得たという話(『十訓抄』巻十ノ三四)

・信光法眼が「引立ル人モナギサノステ船ハ サスガニ法ノ印ヲゾマツ」の歌を詠んで法印の僧位を得たという話(『十訓抄』巻十ノ三四)

が見いだされることから、おそらくは『十訓抄』であるうが、ここでもはつきりとどちらとは言い切ることはできない。

ただ、言えるのは、『十訓抄』の(1)の説話の末尾には力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はすと、古今集の序に書かれたるは、これらのたぐひなり。

とあり、また『著聞集』の同話の末尾にも

「力をもいれずして」と、「古今集」の序に書かれたるは、これらのたぐひにや侍らん。

と、これらの一連の説話が、古今序の歌徳観と関連づけ  
て享受されている点である。

『著聞集』が『古今集』を強く意識していることは、  
序文からも周知のことであるし、また『十訓抄』には、  
この部分以外にも

猛きもののふの心をなぐさむること、和歌には限  
らず。これら、みな管弦の徳なり。また、このこと  
は鬼神の所感にあらざれども、命を助くること嚴重  
によりて、ついでにしるし申す。(巻十ノ二七)

と、管弦の徳力について述べているし、また、

かやうのことのみならず、歌は妹背の中をも和ら  
ぐる媒なるによりて「色めく類、これを花鳥の使い  
とす」ともあり。あるいはまた「貧しき世を渡る橋  
とす」とも見えたり。その(歌の)徳、かたがた多

かるべし(巻十ノ三九)

と、古今序を強く意識した叙述が散見する。前者は仮名  
序であるし、後者は真名序の「至有好色之家。以此為花  
鳥之使。乞食ノ客。以此為活計ノ謀」を踏まえるのであ  
ろう。『十訓抄』の歌徳観には、古今仮名序・真名序が

大きく作用している。この意味では、『十訓抄』は、「た  
だしく『古今序』の『実證』、即ち註釈としての機能を  
果たしている」るのである。直接であれ、間接であれ、  
『沙石集』巻五末の説話に『十訓抄』が大きく作用して  
いることを考えるなら、無住が古今序に無関心であつた  
とは思えない。

また、『沙石集』よりも、少し後の成立と思われる『尊  
円序注』にも、(3)(5)(2)(1)の順でほぼ同一の説話が収めら  
れている。(3)は「めに見えぬ鬼神をもと云事」の注釈と  
して、(5)(2)(1)は「神納受事」の注釈としてである。(2)の  
末尾に「委は拾君抄にあり」とあるので、説話の享受と  
いうことを主体として見るなら、『沙石集』とは兄弟関  
係にあるのだから、少なくとも『十訓抄』の享受圏を  
窓口に、『沙石集』は古今注の世界に接近している。『沙  
石集』において「神明ノ歌ヲ感ジテ人ヲ助給事」と、説  
話の持つ歌徳の質が尊円序注と同様な限定のされかたを  
している点で、無住の歌徳説話解釈は先行する説話集よ  
りも、むしろ古今注の世界に接近しているともいえよう。

・ 仏モシ我國ニ出給ハ、只和国ノ詞以テ、陀羅尼  
トシ給ベシ。惣持本文字ナシ。文字惣持ヲアラハス。  
何ノ国ノ文字カ惣持ヲアラハス徳ナカラム。…中略



：阿字即チ密教ノ真言ノ根本也。(卷五—二)

・天竺・漢土・和国、ソノ詞コトナレドモ、其意通ジテ、其益ステニ同ユヘニ、仏ノ教ヒロマリテ、其ノ義門ヲエテ、利益ムナシカラズ。コトバニ定マレルノリナシ。心ヲエテ、思ヲノベバ、必ズ感応アルベシ。(同)

『沙石集』の和歌陀羅尼説の特色を、言語をめぐる三国的世界観と密教思想であると規定するのなら、これもまた、中世古今注の世界と共通するものなのである。

和歌三國伝来説そのものについては、大和歌の解釈をめぐって、『沙石集』とほぼ同時代の『古今和歌集序聞書三流抄』をはじめ、数多くの古今注に共通するものがあるが、明確に「陀羅尼」の文言を打ち出しているのは、『大江広貞注』、『尊円序注』、『為相註』などであろう。叙述が整理された『尊円序注』であげるなら、(私に句読点を入れた)

日本記には、大和と書てやまとうたとよませたり。

其故は天竺にては陀羅尼の言にてある間、人これをさとりかたし。梵語は一字多合なるあひた、事の心わきまへかたし。故に、言はこはくして漢字に和哥の義なし。梵語を漢土にて漢字に和すと云へとも、

なを言こはく、漢字を我国にて和らけたる故に、大和歌とかきてやまとうたとよめり。

ほぼ時代を同じくする古今注に絞ってみるなら、『沙石集』と古今序の世界は、意外なほど近いのである。

#### 四 述懐ということ

さらに、『尊円序注』で注目されるのは「大和調と云事」の次のような言説であろう。

調の二字を人丸の尺し給ふに、和調は詠也。詠はな  
かめの言なり。なかむるはおもひをのふる義なり。  
心内にもよほして、言にいたすを調といふと尺給へ  
り。：中略：されは、調の種は心也。心よりいひい  
たす言はみな調なり。序にやまと調は人の心をたね  
として、よろつの言のはとそなりにけるとは云なり。  
ここに見られるのは、和歌は「おもひをのふる」もの、  
という認識である。正徹の云うが如く、「述懐は、連歌  
にはかはりて、何にても心に思ふ事を詠む也。懐を述ぶ  
るなれば、祝言をも読むべき也」という定義付けを借り  
るなら、述懐重視の和歌観ということになる。この見  
方は、いくつの中世古今集に類似した表現が見られ  
るものである。

・歌といふは、こゝろざしをのぶることなり。心にあるをば志となづけ、言にあらはるれば哥といふなり。詩正義曰、情動於中還是在心為志、而形於言還是發言為詩云々。彼詩と今哥とおなじ心なり。故不限長短歌等こゝろざしをのぶることゑはみな哥なれば

……〔為家古今序抄〕

・おほよそ、うたはことほりをさきとしておもふ心をいひのぶべき道なるを、いたづらにあそびたはぶれとのみおもへるは、そのさましらぬなるべし。

(同)

・歌と云ハ志をのぶることばなり。(六卷抄)

・文集云述意謂詩發詞曰歌サレハ必シモ三十一字ナラネトモ其心ヲ述ハ皆歌ナリ(古今集註毘沙門堂本)

このほかにも、岡山大学図書館蔵『古今序注』所引ではあるが、「兼好法師が古今鈔曰。歌はこゝろざしをのぶることばなり」とある他、冷泉家流の『為相註』にも「和歌といふ事、人丸臣等語、和は和国風俗、歌はおもひを述る義也云々」という『尊円序注』に類似した叙述が見いだせる。これは、二条家流、冷泉家流を問わず、かなり開かれた場での言説であつたらしい。おそらくは、

『毛詩』大序「詩者。志之所之也。在心為志。發言為詩」に根ざした古今序の發展的解釈が関わってくるのであろうが、これもまた、古今注の言説の中で醸成されたものであることは確かだ。

この述懐重視の和歌観は、先行する『十訓抄』や『著聞集』には必ずしも明示されなかつた。『十訓抄』二十九には、橘直幹が民部大輔への任官を望んで提出した申文が「述懐の詞を書きす」ごしたために、村上帝の機嫌を害したが、大裏の火事のおり帝が「直幹が申文は取り出でたりや」と尋ねたことにより、大変な名誉を得たという「述懐」にまつわる説話がある。しかし、これはあくまでも申文という政治性の強いものであつた。

確かに昇進や任官をめぐる政治性は、従来述懐歌のもつ重要な一側面ではあつたが、無住の和歌観はそれが希薄である。むしろひたすら和歌は「おもひをのふる」もの、という觀念に収束していくのである。先に挙げた例に重複する。

・彼陀羅尼モ、天竺ノ世俗ノ言ナレドモ、陀羅尼ニモチキテ、コレヲタモテバ、滅罪ノ徳、抜苦ノ用アリ。日本ノ和歌モ、ヨノツネノ詞ナレドモ、和歌ニモチキテ思ヲブレバ、必感アリ。マシテ仏法ノ心

ヲフクメラシハ、無疑陀羅尼　ナルベシ。(卷第五本

(一一))

・天竺・漢土・和国、ソノ詞コトナレドモ、其意通ジテ、其益ステニ同ユヘニ、仏ノ教ヒロマリテ、其義門ヲエテ、利益ムナシカラズ。コトバニ定マレルノリナシ。只心ヲエテ、思ヲノベバ、必ズ感応アルベシ。(同)

・心ノスメルヲ師トシ、ミツカラ和歌ヲ詠ジケリ。必シモ三十一字格ニカ、ワラズシテ、ミルコト、聞コトニフレテ、思ヲノブ。(卷第五末(四))

・離別哀傷ノ思切ナルニツキテ、心ノ中ノ思ヲ、アリノマ、ニ云ノベテ、万縁ヲワスレテ、此事ニ心スミ、思シツカナレバ、道ニ入ル方便ナルベシ。古キ歌ヲミルニ、作者ノ心マコトアリテ、思ヲノベタル歌は、遙ニ伝ヘ聞テ詠ズルニ、我心モスミ侍ルヤヤ。

(卷第五末(九))

和歌が陀羅尼として発動し、歌徳を現すときに、「ことわり」と同じように必要なのは、それが「思ヲノベタル歌」であることらしいのだ。この点では、先に挙げた『為家序注』が最も近い位置にあることになる。

『沙石集』には「古人ノ仏法を修行セシ、必ズシモ此

道(和歌の道)ヲステズ。折ニ随フ述懐、コレ多ク聞ユ

をはじめ、「老後ノ述懐ニ」といった表現が見られるし、

『雑談集』には、述懐を題する和歌が目につく(十首)。

同書卷三「愚老述懐」には「此卷ハ殊述懐多シ。同法没後見テ片見ト思テ、可訪菩提。穴賢々々」といった発言も見受けられるほど、無住は無類の「述懐」好きでもあった。あたかも全ての和歌を「述懐」と称しているかのような叙述さえ見受けられる。『沙石集』の跋文そのものも和歌は含まないが「述懐事」とし、自らを述懐する語り手と位置づける。無住にとつて、和歌と散文の間にいかなる径庭があったか速断はできないが、「思ヲノベル」事に対するこだわりは強い。

しかし、少なくとも歌における「述懐」観に関しては、やはり今は古今序の影響を考えるのが順当だろう。先に挙げた略本系本文の末尾には、「和歌は其の根を心地につけ、其花を詞林に開くといへり。この道の口伝、このことばにつきたり。」という真名序に基づく叙述があったはずだ。

この「思ヲノベル」歌に関しても、あるいは、先に挙げた『無名抄』の「をろかなるやうにて妙なる理を極むればこそ、心も及ばず詞も足らぬ時、是にて思ひを述べ、

僅三十一字が中に天地を動かす徳を具し、鬼神を和むる述にては侍れ」やまた、「まして歌は心ざしを述べ、耳を悦ばしめん為なれば、時の人のもてあそび好まんに過ぎたる事や侍るべき」に、その先蹤を見ることは可能である。しかし、それすらも、古今序にまつわる歌徳観に関連づけて述べていることを思えば、今は古今真名序を押さえておくべきだろう。

夫和歌者。託其根於心地。發其華於詞林者也。人之在世。不能無為。思慮易遷。哀樂相變。感生於志。詠形於言。是以逸者其声樂。怨者其吟悲。可以述懷。可以發憤。動天地。感鬼神。化人倫。和夫婦。莫宜於和歌。

述懷歌そのものは、その淵源を大江千里の「句題和歌」に求めることができるが、中世の述懷歌は「堀川太郎百首」に始まるといわれる。また、その形式は、奉獻の形を取ることが多く、述懷が題となっている歌合を見ると、「住吉社歌合」「広田社歌合」「別雷社歌合」をはじめとして、そのほとんどは社頭歌合である。述懷歌は中世に入り、神祇や仏寺という宗教的な場に深く結びつくことで、歌徳説話への通路を広げた。この動きは、古今真名序に見る述懷の機能と無縁ではない。小川豊生

氏は「歌徳論序説」の中で歌徳説話と真名序を関連させた上で述懷歌の本質を次のように述べた。

（述懷歌は）別の表現を用いれば、「自己の憂愁・悲嘆・諦観・苦悶・激憤を虚構の世界で（非虚構の世界でも）激情的に構築する言語形態と定義できる。

したがって「述懷」というテーマは、私的言語に内在する力によって、なんらかの事態が自己の希求する形に置いて惹起されることを語ろうとする歌徳説話にとつても本質的なものだとと言える。歌徳説話を成り立たせる歌は、広い意味での述懷歌にほかならないのだ。

『沙石集』巻五で、「思ヲノベ」る歌、即ち述懷歌によつて、歌徳は顕現すると言ふ無住は、この述懷歌の本質に、充分に自覚的だったと言える。

## 五 おわりに

「思ヲノベ」る歌、すなわち述懷歌をめぐる言説において、無住の歌徳観は、古典序と密接な関係をもっている。その背景にあるのは、中世隆盛を見た古今注の世界との接触であるうし、またそれは、真名序の受容をめぐる広い底辺をもった流れの中で理解せねばならないもの

だろう。しかもお世辞にも上手とは言いかねる彼の詠作からみて、かなり開かれた世界のそれであったと思われる。その間に付置されなければならないものが『無明抄』を中心とした長明歌論をはじめ、いくつかの説話集所載の和歌であったことは言うまでもない。『沙石集』の説話の出典にはまだまだ不明の点が多いが、少なくとも、かなりの数の仏典以外の「書籍」を携えていたはずだし、例えそれが僧であったとしても歌人（あるいは連歌師）との交流もあつたにちがいない。無住の和歌観の生成にはあといくつかの階梯が予想される。

注

- ① テキストは、特にことわりのない限りは、梵舜本を底本とする岩波古典文学大系を使用し、必要に応じて、広本系では米沢本を底本とする『廣本沙石集』、略本系では『慶長十年古活字本沙石集総索引一影印篇』と長享本を底本とする岩波文庫『沙石集』を参照した。
- ② 新日本古典文学大系『袋草紙』上巻
- ③ 新潮日本古典集成『発心集』
- ④ 三角洋一「いわゆる狂言綺語観について」『日本文学を讀みかえる四 秘儀としての和歌一行為と場』一九九五年一月 有精堂
- ⑤ 岩波古典文学大系『歌論集 能楽論集』
- ⑥ 岩崎礼太郎「鴨長明の歌論における「ことわり」の根元

性』『新古今歌風とその周辺』一九七八年 笠間書院

⑦ 注④に同じ

⑧ 小林直樹『沙石集』と『摩訶止観』注釈書『人文研究』一九九三年一月

⑨ 小島孝之「無住晩年の著述活動」『中世文学研究叢書 中世説話集の研究』一九九九年三月 若草書房。小林直樹

「真如の顕現——『沙石集』の構想——」『人文研究』一九九四年一月

⑩ 「和歌陀羅尼攷」『伝承文学研究』一九八三年一月

⑪ 大津有一「伊勢物語古註釈の研究」一九五四年三月 宇都宮書店

⑫ 新日本古典文学大系『古今和歌集』以下古今序の引用はこれによる。

⑬ 上岡勇司「古今集注釈書における『歌の徳』」『講座 平安文学論究』第二輯 一九八五年五月 風間書房

⑭ 日本古典文学全集『十訓抄』以下引用はこれによる。

⑮ 新潮日本古典集成『古今著聞集』以下引用はこれによる。

⑯ 荒木 浩「説話の形態と出典注記の問題——『古今著聞集』序文の解釈から——」『国語国文』一九八五年一月

⑰ 荒木 浩「十訓抄と古今抄」『国語国文』一九八六年七月

⑱ 尊田親王（一二九八—一三四八）作並びに筆と言われている。二条家流。『古今序注曼珠院藏』京都大学国語国文資料叢書二

⑲ 本節表中(4)と同一の和歌の異説（大伴家持の妻が大病となり、娘が和歌を詠んだとする）が、『大江広貞古今注』

(片桐洋一「中世古今集注釈書解題一」に「目に見えぬ鬼神をもあはれと思わせ」た例として存在する。

⑳ 注⑩に同じ

㉑ 片桐洋一「中世古今集注釈書解題一」

㉒ 片桐氏は、前注書の中で、「古今和歌集序三流抄」「大東急文庫本古今集序注」「毘沙門堂本古今集註」「国会図書館本古今和歌集序註」「叡山文庫本頼阿注」「宮内庁書陵部所蔵冷泉持為注」「菅古今序注」をあげている。

㉓ 「古今集註京都大学蔵」 京都大学国語国文学資料叢書四十八

㉔ 「正徹物語」 日本古典文学大系「歌論集 能楽論集」

㉕ 片桐洋一「中世古今集注釈書解題一」「文永元年(一一二

六四) 終了」の記事を持つ。

㉖ 片桐洋一「中世古今集注釈書解題三」嘉暦三年(一一三二八)の奥書を持ち、為家以来の二条家説をまとめている。

㉗ 「未刊国文古註釈大系 第四冊」著者未詳。鎌倉時代末期成立か。六条家流の説を主に二条家流を参考にしている。

㉘ 中世の文学「雑談集」三弥井書店

㉙ 内田 徹「述懐歌の形成」「文芸と批評」一九八七年三月

㉚ 「歌徳論序説」「日本文学を読みかえる四 秘儀としての和歌」一九九五年一月 有精堂

(龍谷大学仏教文化研究所客員研究員)